

ラテン・アメリカのアイデンティティと建築表現の考察 サンタ・クルスーボリアにおける空間形式の提案

指導教官 北山恒教授 西沢立衛助教授 金城真奈美 秋元馨助手

■序章

文化的アイデンティティと建築表現とは 共有の特質や思想が文化的アイデンティティ（文化的独自性）の明確な指標であるが、本質的に何かのアイデンティティを判定するには他の存在に対しての相違点が必要である。例えば、「共同体である」と言う意識は他の共同体との相違点に気付いた時に初めて生まれる認識であり、どの文化も他の文化との比較と対比で自分自身の特性を定義できる。

一つの文化が形成されるために様々なプロセスが考えられるが、ラテン・アメリカの場合は自発的なプロセスではなく、外国の支配から大きな影響を受け、文化的アイデンティティが形成されてきた。文化的アイデンティティの形成プロセスで、ラテン・アメリカが異文化から大きく影響を受けた出来事は多くあるが、主な3つを挙げると、15世紀末のヨーロッパによる征服事業、20世紀の現代化、および21世紀現在のグローバル化にある。それぞれの時代に、ラテン・アメリカは先進国から強い影響を受けたため、それらの国々と多くの共有特質が生まれた。その結果、ラテン・アメリカの文化的アイデンティティを定義する際には、それ自身のオリジナリティーについて混乱することが多い。

建築的アイデンティティは、一つの文化の建築表現の特質から形成され、設計者も設計行為を通して文化的アイデンティティの成立に貢献するのは確実である。建築設計をする際には、その表現はラテン・アメリカという文化のアイデンティティを表現しているのか、他文化で生まれた表現を模倣しているだけか、設計者も戸惑うこともある。

論文の目的と構成 本論文の目的は、ラテン・アメリカの文化的アイデンティティの形成を理解し、サンタ・クルスーボリアを設計提案対象としてとりあげ、その文化に適切な設計を提案することである。1章では、ラテン・アメリカの文化形成に関する重要な歴史的事実に注目する。2章では、ラテン・アメリカの建築的アイデンティティを理解するために歴史上の重要な出来事を述べる。3章では、文化的アイデンティティ理論とこの課題に関する建築家の相互作用について考察する。設計提案対象として、サンタ・クルスーボリアをとりあげ、その建築的な背景を理解するために、植民地から現在に至る建築表現の展開と空間形式の進化を考察する。4章では、サンタ・クルスーボリアにおける設計提案をする。

■1章 ラテン・アメリカの文化的な背景

ラテン・アメリカの定義 ラテン・アメリカとは北アメリカ大陸の南部から南アメリカ大陸にかけて存在し、ラテン系の言語が話される国または地域の総称である。言語の他に、この国々はラテン系文化の伝統と宗教（カトリシズム）の共通点を持つ。

現在、一般的にラテン・アメリカと呼ばれるのは、スペイン語を公用語とする18カ国（メキシコ、キューバ、ドミニカ共和国、コスタ・リカ、エル・サルバドル、グアテマラ、ホンジュラス、ニカラグア、パナマ、コロンビア、ベネズエラ、エクアドル、ペルー、チリ、アルゼンチン、ボリビア、パラグアイ、ウルグアイ）とポルトガルの元植民地ブラジル、そしてフランス語を公用語とするハイチである（図1：ラテン・アメリカとボリビアの位置）。



古代アメリカの文化 15世紀末にスペインとポルトガルの航海探検により、ヨーロッパ人がアメリカ大陸に到着した。探検隊が到着した時、この地域には主に3つの文明、アステカ、マヤとインカ帝国が存在していた。世界の他の地域とはほとんど接点なかったが、古代アメリカ人はそれ自身の力で創造した独特な文化を新世界で達成していた。文明の中心であった都市は繁華で壮大な都市であり、建築も高度な技術で造られていた。

ヨーロッパによる征服事業の特質 原アメリカの主な文明はピラミッド状に社会を構成し、神性に直接権限を与えられた王が絶対的な権威者であった。15世紀末に新大陸に存在していた文明の人口に比べると、征服事業は少人数の組織であったが、スペイン人の攻撃によって原住民の王が降参し、文化は滅亡した。その後、ヨーロッパ人によって新しい社会が設立され、最も権力を持っていたのはスペイン人であった。本国から派遣されたスペイン人、新大陸で生まれたスペイン人、原住民やアフリカから強制移住された黒人労働者より階層社会が形成され、このように、複雑な階層や権力の配分から社会的な問題が多かった。

新しい都市の成立 原住民が築いた都市が破壊され、その跡地に新しいスペイン風の街が建設されることが多かった。しかし、メキシコからアルゼンチンまでの広い地域には、まだ文明化していない地域が多くあり、このような地域にも植民地が建設された。原アメリカの文化が栄えていた地域に建設された都市では、植民地以前の文化とヨーロッパから輸入された2つの文化が融合され、文明化の進んでいなかった地域に設立された都市には主にヨーロッパの文化やライフスタイルを基本として文化的アイデンティティを形成していった。

■2章 ラテン・アメリカのアイデンティティ

ラテン・アメリカの建築的な展開 旧世界の王室が実施させた法律やライフスタイルを出发点に、ラテン・アメリカの文化が新しい時代を迎えた。植民地時代のラテン・アメリカで最初に建てられた建築は、当時のスペインとポルトガルで普及していた建築様式に基づいた。この状況は、ラテン・

アメリカの国がヨーロッパから独立する19世紀まで続いたが、その後、スペインとポルトガルとの交流が一次中断し、フランス、イタリア、イギリス、ドイツなどの国と交流するようになった。19世紀前半からイタリアのネオ・ルネサンス、フランスのボザールなどの影響がラテン・アメリカで強く感じられ、長い間、イクレクティシズムが主な建築表現であった。1920年代頃まではアール・ヌーボーとアール・デコが広い範囲で使用された。ラテン・アメリカの現代化 20世紀前半にラテン・アメリカの多くの国が急激な都市化プロセスを経験し、産業化プロセスを迎えた一部の国では、人口の50%以上が都市に住んでいた。急激に変化した社会のニーズに対応する必要があり、世界中で普及していた合理主義の新技術や材料が答えとして採り入れた。

グローバル時代とラテン・アメリカ21世紀現在、ラテン・アメリカも世界中に広がっているグローバル化に覆われている。このグローバル時代では、インターネットなどの最先端技術を用いて、世界中の国々のコミュニケーションがリアルタイムで行われることが可能となり、世界の文化も一つのグローバル文化になると言われる。しかし、現在のラテン・アメリカの国は、経済、政治、社会的に発展している国とまだ発展途上国である国が共存し、矛盾の多い状況が続いている。この複雑な現実の中、ラテン・アメリカのアイデンティティの認知を高め、歴史の展開が新しい将来に繋がる事が期待されている。

■3章 論考から実施計画へ

建築設計プロセスとアイデンティティ 建築表現とアイデンティティは、分野によって異なる視点から考察されることは当然であり、例えば設計者、歴史人、評論家、社会学者、それぞれ違う方向からアイデンティティ理論を考察する。設計者は、過去の出来事を背景にし、まだ存在しない設計提案を創造することでアイデンティティの課題にアプローチする。本論文では、サンタ・クルスーポリビアという場所に重点を置き、設計提案の対象にする。そこにある文化的アイデンティティを理解するために、歴史の考察を行った。

ポリビアの概況 ポリビアは南緯17.8° 西経63.2° に位置し、南アメリカの中心に存在する。ポリビアの総面積は109万8581km² で日本の約3倍の広さもある。2002年のデータによる人口は871万人で、ポリビアは密度の低い領域だと明確になる。スペインの植民地であったこの国では、先住民55%、混血32%、欧州系13%の社会構成が見られる。言語はスペイン語（他にケチュア語、アイマラ語）、宗教はカトリック教であり、言葉と宗教はスペインの大きな2つの遺産である。恵まれた自然環境の中に存在する資源の多いポリビアは、産業が発展していないため、他のラテン・アメリカの国と比較すると技術的にも遅れている。建築に関しても、経済的な問題から、先端の技術は一般的に使用されるのはまだ難しい状況にある。

ケース・スタディ：サンタ・クルスーポリビア サンタ・クルス市は、ポリビアの西にあるサンタ・クルス県に位置する。約37万km²に136万人が住んでいる場所である。1561年サンタ・クルス市がスペインの征服者によって建設され、最初の都市計画はインディアス法令に基づいて実行された。1950年代までサンタ・クルス市の拡張は注目に値する程ではなく、約5万人の人口がその場所に住んでいた。1970年代から、人口は急激に増加し、現在は100万人を超える数字に至っている。中心部の土地価格も増加した結果、密度の低い市街地の外側に定住する傾向が見られる。

サンタ・クルスの建築表現 サンタ・クルスの植民地建築は、短命なタイポロジーから始めた。建築材料はほとんど自然な状態で使用され工法的には単純な技術が用いられた（図2）。空間形式は一般的にワンルームであり、熱帯地の気候に対応する半外部空間が設けられることもあった。18世紀半ばから、現在ガレリアと呼ばれる外部と内部の間に生まれる半外部の空間が誕生した（図3）。木の柱から構成するガレリアは、一列に並べられた部屋の両側に設けられ、道路と敷地の内側にあるパティオ（中庭）に面した。19世紀末にサンタ・クルスは経済成長を経験し、上階層は外国で流行であった建築様式を購入し、ラテン・アメリカで普及していたイクレクティシズムがサンタ・クルスでも使用された（図4）。これは外形やファサードに関心を集中する表現で、ガレリアの柱は木ではなくレンガで作られ、屋根の瓦もパラペット隠された。その後、道路側のガレリアはなくなりましたが、敷地内ではガレリアとパティオの構成が使い続けられた（図5）1950年代から都心部の人口が急激に増加した。国道が設備された結果、サンタ・クルスは国の他の地域と外国に連結し、発展し始めた。タイル、ガラス、鉄筋コンクリートなどの新しい材料も使用されるようになり、建築表現が、成長していく社会のシンボルとして「モダン」建築に挑戦した。この歴史の時点から、サンタ・クルスの入り口の人口が増加し続けた。建築の表現も様々であり、外国の表現と技術が輸入され続ける事実がまだ見られ、不均質性の高い風景が街の特徴である（図6）。

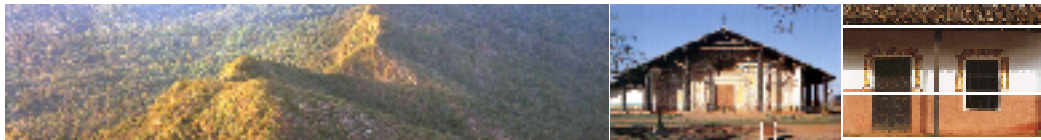


21世紀に入り、グローバル時代に覆われるサンタ・クルスでは、貧富の差、社会階級問題、経済の不景気などの問題により、アイデンティティ認知はまだ混乱状況にある。植民地時代に、サンタ・クルスでは文明化プロセスは進んでいなかったため、コロニアル（植民地時代の）文化がサンタ・クルスの伝統と言われ、当時の建築表現を用いて、今でもサンタ・クルスの建築が表現されることもある。

■4章 サンタ・クルスーポリビアにおける設計提案

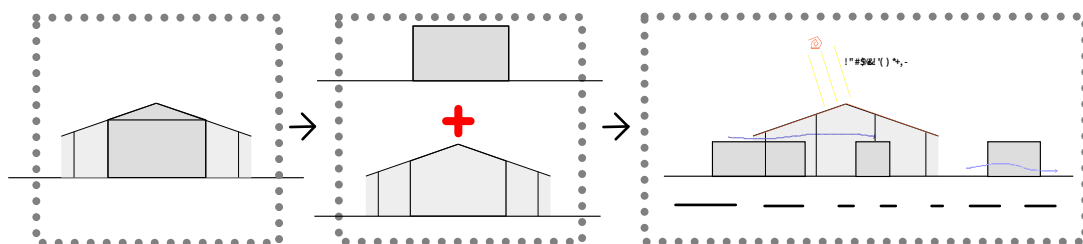
敷地状況 サンタ・クルス市から北東200キロメートル離れているチキトスという場所が本プロジェクトの敷地である（図7）。16世紀にイエズス

会の宣教師が開拓した伝道村でセカンド・ハウスを設計する。村の名前はコンセプトといい、植物があふれ、牧畜と材木の生産が主な活動である。1990年にユネスコによって伝道村の教会が世界遺産と指名されたこの地域には、国内と国外から多くの観光客が訪れる（図8.9）。基本的には乾期と雨期の2つの季節があるが、熱帯地方に位置するサンタ・クルスの平均温度は24℃、平均湿度は65～70%である。主な風向は北～西北であり、冬期の7～9月は南に変わる。

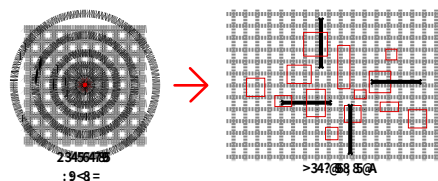


プログラム サンタ・クルスの一般的な住宅は、家族の日常生活の場であることが前提であり、家族のメンバーではない「外」の人が訪れる場合のためには、「外」専用のリビング、ダイニングルームなどが一般的に設けられる。「内」用には家族のリビングルーム、ダイニングルーム、居室などがある今回のプログラムは従来の状況とは違い、この家の空間はコモン・スペースであることが前提となる。状況によって、施主と数人の友人が同時に使用することになるこの家は、個人の家というよりも、皆で空間を共有しながら交流する場所である。ゲストあるいは家主専用のスペースは設定せず、どの空間でも自由に使用できるプログラムが構成された。しかし、プライバシーが保護できる空間も必要であるため、このような空間は箱として設置された。この箱も家主であるかゲストであるか、無関係に誰にでも使用されることになる。

コンセプト空間形式 サンタ・クルスで一般的に用いられる空間形式は、木のフレームとレンガの構造を組み合わせる工法である。室内はレンガで囲まれ、屋外との間にガレリアを木造で組むことが一般的である。強い日差しと雨の多い気候のため、勾配屋根が適しており、瓦屋根を使用する頻度が高い。本プロジェクトでは、木のフレームとレンガの積層を一回分解し、違う形式で再び組み合わせることで空間体験のバリエーションを提案する。外部、半外部と内部空間の接し方が変わることによって空間の体験に可能性が増える。構造物全体を巨大ガレリアとすることで、半外部の空間が今までより圧倒的に多くとられる。ガレリアは流動性の高い空間で開放感が強い。木造の屋根と箱の屋根がダブル・ルーフ構造になるため、断熱機能が高くなり、昼も夜も涼しい空間が確保できる。



構成 サンタ・クルスの住宅構成は、社会と文化の発展によって変化したが、植民地時代から現在までの住居構成には共通点から見られる。住宅の構成は、基本的に3つのエリアで成立する；社会に公開するソーシャル・エリア、家族が日常を過ごすプライベート・エリアと、なるべく見えない場所に洗濯物、料理、使用人（メイド）のエリアがある。今回の提案では、この住まいを構成する全ての空間は、ヒエラルキーをもたずに敷地に配置される。自然の中に周囲と融合する等スパンの木の柱のグリッドを設定し、その上に人間を守る屋根を設ける。このグリッドから生まれるシェルターは自然の中に存在する人工的な秩序を表す。木材の屋根の下に配置された箱は、日常生活の中でプライバシーを守る機能を果たす。このボックスでは温度、明るさなど、環境の調整ができ、少ない冬の日の居場所にもなる。等スパンのグリッドでは、方向性が明確になるのではなく、中性的に拡大できる。ヨーロッパの植民地時代ではこういうグリッドが都市計画の中で使用されたのだが、中性的であるグリッドに一つのポイントを強調することで中心が生まれた。今回の屋根のグリッドは植民地の都市計画で使用されたものとは異なり、中心を示すことはない。



屋根の下に配置される機能のボックスもノン・ヒエラルキーな関係で配置され、それぞれ一つの中心とも見なされ、世界には一つの中心があるだけではなく、様々な中心が存在することのメタファーでもある。



